

地理歴史・公民科

事例 1 学びの過程を重視した授業の実践
～ 「A 4 判シート」で行う、生徒の考えの比較と関係付け ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 44

事例 2 生徒間の学びを重視した授業の実践
～ フォトランゲージで育む課題解決能力 ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 52

事例 3 対話を通して理解の深化を図る授業の実践
～ 歴史への関心を高め、思考力の育成を目指す ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 62

研究協力委員

栃木県立宇都宮清陵高等学校	教諭	日下田 圭 祐
栃木県立栃木農業高等学校	教諭	畠 山 敏 幸
栃木県立大田原高等学校	教諭	片 柳 剛 史

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	興 野 寛 久
----------------	------	---------

○地理歴史科における「主体的・対話的で深い学び」

平成29年3月に、中学校の学習指導要領が改訂された。新学習指導要領で示された目標の中では、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方（「見方・考え方」）が示された。

中学校社会科においても、「社会的な見方・考え方」は、各分野の特質に応じて、次の三つに整理されている。

地理的分野	「社会的事象の地理的な見方・考え方」 社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けて働かせる。
歴史的分野	「社会的事象の歴史的な見方・考え方」 社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりして働かせる。
公民的分野	「現代社会の見方・考え方」 社会的事象を政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けて働かせる。

さらに、今回の改訂の基本的な考え方の一つとして、基礎的・基本的な「知識及び技能」の確実な習得と共に、これらの「社会的な見方・考え方」を働かせた「思考力、判断力、表現力等」の育成が示されている。

高等学校の新学習指導要領は、平成29年度中に公示される予定である。改訂の方向性は上記の中学校社会科と同じであると考えられる。つまり、地理歴史科ならではの「問い」を基に、「社会的な見方・考え方」を働かせる中で、社会的事象に関わる課題を追究したり解決したりする活動等を一層重視することが大切であり、資料等を有効に活用して論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなど、地理歴史科ならではの言語活動に関わる学習を更に充実させることが求められるのである。本研究のテーマである「主体的・対話的で深い学び」も、これらの取組が実現の鍵を握っている。

本冊子は、「地理歴史科における主体的・対話的で深い学び」の実現のために取り組んだ、授業改善の三つの実践事例である。

事例1では、「世界史B」において「第一次世界大戦とロシア革命」を題材に扱った。ヨーロッパの当時の情勢を分析するなどして、関係国それぞれの対応の背景を班で考え、簡潔に表現する過程を通した学びを目指した。

事例2では、「日本史B」において「満州事変」を題材に扱った。三人がそれぞれ調べて考えたことを持ち寄り、三人で話し合いながら、班の意見を練り上げ、発表することを通した学びを目指した。

事例3では、「地理A」において「気候」と「地域の人々の暮らし」を題材に扱った。写真から課題解決につながる情報を読み取り、班で話し合いながら、課題を追究していくことを通した学びを目指した。

これらの事例を、今後の授業改善における視点の一つとして参考にしていきたい。

事例 1 学びの過程を重視した授業の実践 ～ 「A4判シート」で行う、生徒の考えの比較と関係付け ～	
単元名	＜世界史B＞ 第一次世界大戦とロシア革命
これまでの課題	・これまでは、教師の説明をもとに進める講義形式の授業が大半であった。他者の意見を聞いて、多面的・多角的に考える機会が少なかった。もちろんこのような学習活動を授業に取り入れる動きは進んでいる。しかし、事前準備等に時間がかかる事例が多く、積極的な導入の妨げになっていた。
授業改善のポイント	・生徒が主体的に学習活動を行い、深い学びにつながる授業になるよう、教師が学習主題を設定し、生徒の考えをもとにしながら考察の過程を示して指導する実践を重ねた。 ・生徒の考えをクラスで共有し、生徒の学びの過程を黒板で「見える化」できる「A4判シート」を活用した提示手法について工夫をしたことで、分かりやすく授業が展開でき、授業の準備等も容易になった。

1 指導観

(1) 本単元について

19世紀後期以降の世界を扱う。第一次世界大戦については、大戦の勃発に至る経緯、総力戦としての性格、大戦後の世界の変化などについて、多面的・多角的に捉えさせる。ロシア革命については、革命の経緯だけではなく、革命後に成立したソヴィエト連邦が世界に与えた影響とその後の国際秩序の変化にも触れる。

この時代が、科学技術の発達や生産力の発展を背景に、地球規模で世界の一体化と相互依存が強まっていったことについて理解させ、人類が直面する課題を考察させるとともに、これからの世界を展望させる素地を育成したい。

(2) 生徒の実態

歴史は「受験のための手段」と捉えており、与えられた知識を覚えていくという受け身の姿勢で学習に取り組む生徒が多かった。そのため、歴史を時間軸で把握することは得意であるが、歴史を横のつながりで見る力が不足している。

また、地理的素養が不足している生徒もいたことから、ワークシートにおける作業や、グループワークなどを繰り返すことを重ね、基本事項の確認をしてきた。このことにより、年度当初に比べて能動的に学習に取り組む姿が見られるようになっている。

(3) 生徒に身に付けさせる力

世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解させ、文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせ、歴史を学ぶ意義を実感させたい。そのために、適切な学習主題を設定して探究する学習を一層重視して、世界史の学び方や歴史的思考力を培うようにする。多面的・多角的に考察したり、協同的に活動したりして、自分の考えをまとめ、考えを深化・発展させる能力を育成したい。

2 単元の指導計画及び評価計画

(1) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
第一次世界大戦前後の流れについて関心を高め、世界の一体化や相互依存関係を、歴史的観点から探究しようとしている。	第一次世界大戦やロシア革命に関して、経過や結果などを多面的・多角的に考察しながら、協同作業を通じて適切に表現している。	第一次世界大戦やロシア革命に関する情報や資料の収集などを行い、有用な情報を選択して活用し、図表にまとめている。	第一次世界大戦やロシア革命の動向や社会の特質、その後の影響を理解し、それらの知識を身に付けている。

(2) 単元の評価計画

次	時	学 習 内 容	評 価 規 準
1	1 本時	バルカン半島の危機	【思考・判断・表現】 ・サラエヴォ事件に至る経過について、他者と協力しながら多面的・多角的に考察し、適切に表現している。 【関心・意欲・態度】 ・第一次世界大戦への興味・関心を高め、各国の動きを予測しようとしている。
2	2	第一次世界大戦の勃発	【資料活用の技能】 ・第一次世界大戦が起こる背景について、各種の資料から有用な情報を読み取り、効果的に活用している。 【知識・理解】 ・第一次世界大戦における各国の動向を理解している。
	3	戦時外交と総力戦 大戦の結果	【知識・理解】 ・イギリスの外交戦略と現在のパレスチナ問題の関連について理解している。 【思考・判断・表現】 ・第一次世界大戦の転換点や意義を、多面的・多角的に考察している。
3	4	ロシア革命	【思考・判断・表現】 ・二月革命、十月革命の動向について、多面的・多角的に考察し、適切に表現している。 【関心・意欲・態度】 ・社会主義国家の登場について関心を持ち、歴史的観点から探究しようとしている。
	5	ソヴィエト政権と戦時共産主義 ネップとソ連の成立	【思考・判断・表現】 ・対ソ干渉戦争に関して、当時の国際関係を多面的・多角的に考察し、適切に表現している。 【知識・理解】 ・戦時共産主義や新経済政策の特質について理解している。

3 本時の展開（5時間のうちの1時間目）

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準 [評価方法]
導入 5分	ヨーロッパの国際関係の復習	・ヨーロッパの主要国を、三国協商と三国同盟のグループに分ける。 ・ファショダ事件など、国際関係の転換点を確認する。	・国名マグネットを活用して板書する。 ・バルカン半島の地理的な重要性も踏まえる。	
展開 40分	バルカン問題を理解する サラエヴォ事件に至る過程とその背景を考える サラエヴォ事件後の流れを予測する	・教科書を順番に音読する。 ・青年トルコ革命から第二次バルカン戦争に至る流れを理解する。 ・ワークノート(教科書準拠)の空欄補充をする。 ・「重要事項シート」に示した、 ①青年トルコ革命 ②バルカン同盟 ③第一次バルカン戦争 ④第二次バルカン戦争により、オーストリア、セルビア、ロシア、ドイツはどのような感情を抱いたのかを考え、各国ごとに「感情シート」(青/赤)にまとめる。 ・「感情シート」を班ごとに ①青年トルコ革命 ③第一次バルカン戦争 ④第二次バルカン戦争の位置に貼り、説明する。 ・発表をノートにまとめる。 ・サラエヴォ事件に関する教師の説明を聞き、各国がどのように行動するかを予測する。	・4枚の「重要事項シート」を黒板に順に貼りながら説明する。 ①青年トルコ革命 →②バルカン同盟 →③第一次バルカン戦争 →④第二次バルカン戦争 ・4名の班をつくる。 ・①～④の出来事が、その国にとってプラスであれば「感情シート」(赤)、マイナスであれば「感情シート」(青)に書かせる。 ・「感情シート」には理由だけを油性ペンで記入するように指示する。 ・「重要事項シート②バルカン同盟」は、黒板に貼ったままにし、思考の参考にさせる。 ・発表時間に注意する。 ・説明が不十分な時は教師が支援する。 ・次時で扱う「第一次世界大戦」の単元へつなげる視点が持てるよう考えさせる。	【思考・判断・表現】 ・サラエヴォ事件に至る経過について、他者と協力しながら多面的・多角的に考察し、適切に表現している。[発表内容] 【関心・意欲・態度】 ・第一次世界大戦への興味・関心を高め、各国の動きを予測しようとしている。[観察、リフレクションカード]
まとめ 5分	本時の振り返りと次時の準備	・リフレクションカードに記入する。		

4 実践の様子

(1) 第1次（第1時）（本時）

ア 「A4判コピー用紙」の活用ーKP法（紙芝居プレゼンテーション法）を参考にして

KP法とは、川嶋直（日本環境教育フォーラム理事長）が提唱しているプレゼンテーション手法である。「A4判コピー用紙」に伝えたい内容を簡潔に記入して、黒板に磁石で貼り付けるこの手法には、いくつかのメリットがある。例えば、基本的に一画面しか表示できないプレゼンテーションソフトと違い、「前のコピー用紙を残したまま、説明を続けることができるため、授業の流れや重要事項が分かりやすく黒板に残る」ことである。また、「板書時間が減り、教師が生徒と関わる時間が増える」、「ペンで上書きができるので、追加や修正が容易である」などもメリットである。KP法はプレゼンテーション手法として提唱されたことから、説明する教師の活用方法に注目されがちである。

そこで本研究では、「A4判コピー用紙」に教師が記入し、説明に使用するだけでなく、生徒も作成をすることで、主体的・対話的で深い学びにつなげられるのではないかと考え、授業実践を行った。本研究では、用途に応じて「A4判コピー用紙」の名称を使い分けている。その説明は次のとおりである。

「A4判シート」

- ・「目標シート」
- ・「国名シート」・「説明シート」
- ・「重要事項シート」
- ・「感情シート」（青/赤）

…シートの総称。全て横置きで作成。

…教師が事前に作成。本時の目標を記入。

…教師が事前に作成。教師が説明の際に使用。

…教師が事前に作成。生徒の思考の手助けとして使用。

…生徒が授業で作成。生徒が発表の際に使用。

なお、「A4判シート」については、見やすい記入を心掛け「太い字」・「3～4行」・「20字程度」の基準を設けた。このルールは、生徒にも同様に周知した。

イ 導入

「目標シート」を貼って本時の目標を生徒に示すとともに、4枚の「国名シート」を貼り、本時で扱う主要な国々を意識させた。そして、本時で扱う時代の背景を明確にするために、青年トルコ革命から第二次バルカン戦争に至る流れについて、「説明シート」を活用して、既習の内容を説明しながら復習をした。同時に生徒は、手持ちのワークノート（教科書準拠）の空欄補充にも取り組んだ。なお、説明には「国名マグネット」を使用し、説明時間の短縮と、分かりやすい板書につなげる工夫をした。

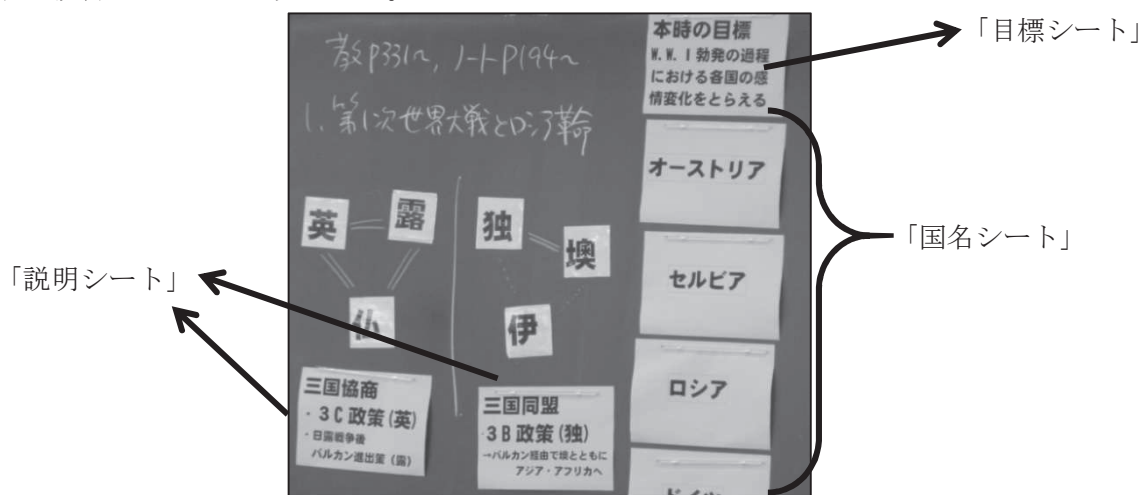


図1 黒板の様子1

ウ 展開 1

まず、生徒は教科書の本文をしっかりと読み込んだ。次に、教師が、横軸に4枚の「重要事項シート」を時系列に沿って黒板に貼り出した。そして、青年トルコ革命から第二次バルカン戦争を経て、サラエヴォ事件に至る経緯と要点を、「説明シート」を貼り加え、地図などを効果的に板書しながら説明した。なお、「重要事項シート」に示した内容と順番は、次のとおりである。

①青年トルコ革命 → ②バルカン同盟 → ③第一次バルカン戦争 → ④第二次バルカン戦争

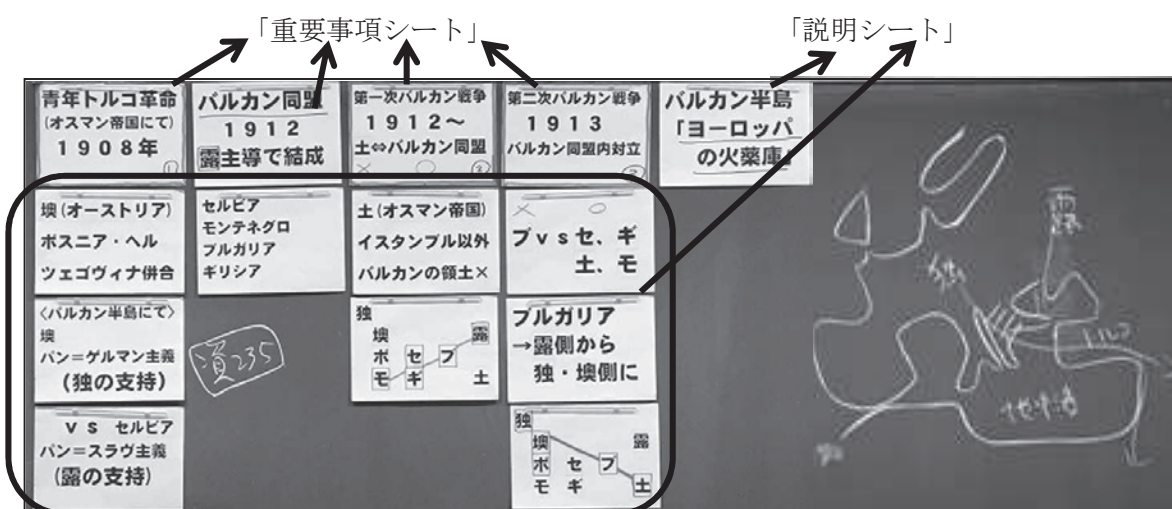


図2 黒板の様子2

エ 展開 2

4枚の「重要事項シート」の内容のうち、①青年トルコ革命、③第一次バルカン戦争、④第二次バルカン戦争の三つの事項について、オーストリア、セルビア、ロシア、ドイツの4か国は、それぞれどのような感情を抱いたのかを（そのような感情を生んだ理由も含めて）考えさせた。生徒を4人組4班に分け、それぞれオーストリア、セルビア、ロシア、ドイツの1か国を担当させた。

班の考えは「(国ごとの) 感情シート」にまとめた。「感情シート」は赤と青の2色を用意した。その国がプラスの感情を抱いたと考えた場合は、赤の「感情シート」に書き、その国がマイナスの感情を抱いたと考えた場合は、青の「感情シート」に書いた。班によっては、プラス・マイナスのどちらかに決められないので、赤と青の「感情シート」を両方使用する班もあった。

完成した各班の「感情シート」は、黒板の所定の位置（「国名シート」と「重要事項シート」がクロスする箇所）に貼るよう指示した。



図3 「感情シート」を貼る生徒の様子

オ 展開 3

各班の「感情シート」が貼られると、赤と青の色の違いで、傾向を大きくつかむことができた。その国にとって、その出来事がプラスだったのか、マイナスだったのかを、一目で見通すことができ、全体を捉えやすかった。

一方で、次のように、事前に教師が想定した展開とはならなかったものはいくつか存在した。

- ・「重要事項シート」の出来事ではない時点のことを考えてしまった。
- ・「感情シート」の色を間違ってしまった。
- ・「感情シート」の作成が終わらず、貼ることができない箇所ができてしまった。
- ・「感情シート」に誤った内容を、全部（一部）記入してしまった。

生徒が貼り出した「感情シート」をもとに、教師が各班の生徒と口頭でやり取りをしながら、生徒は理由を説明したり、各国がどのように行動するかを予測したりした。生徒からは、「セルビアが窮地に追い込まれてサラエヴォ事件が起こった」、「ドイツは有利に進めていたからこそ、一気に戦争に向かった」などの反応があり、思考が深まっていく様子がうかがえた。こうして、第一次世界大戦のきっかけとなるサラエヴォ事件の説明を行っていった。

なお、上記に示した想定外の展開については、教師と生徒とのやり取りの中で訂正や補足をして、生徒が誤った理解をしないよう配慮した。

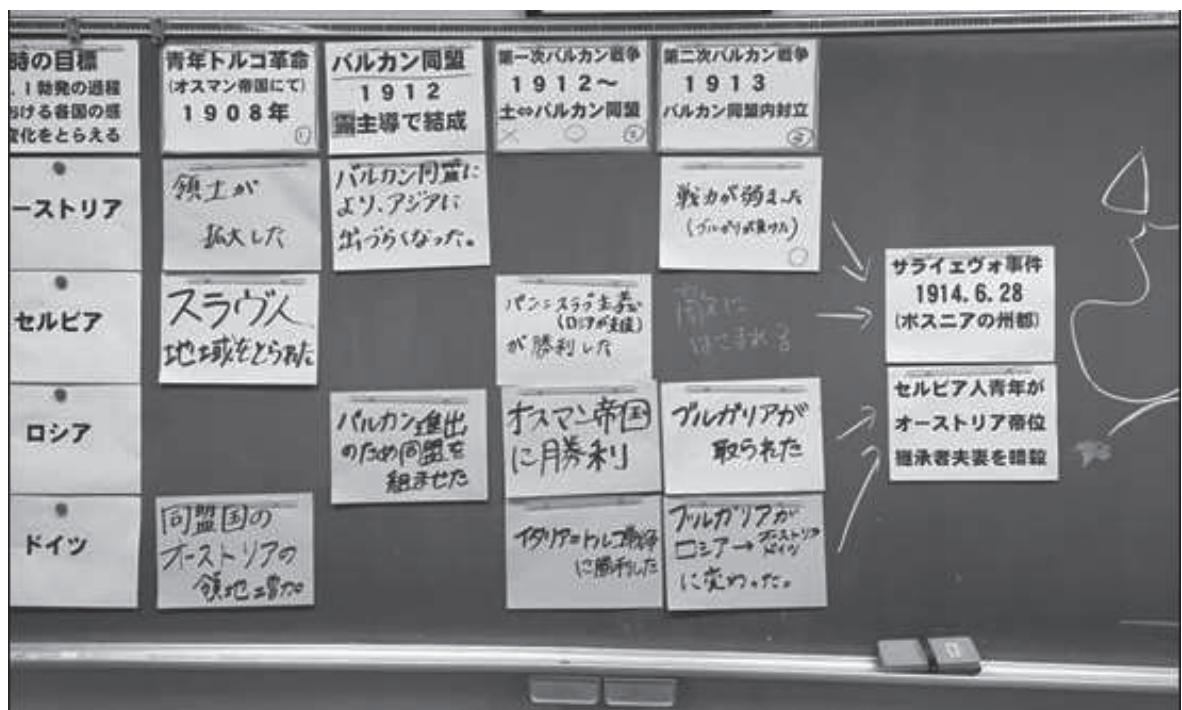


図 4 生徒が作成した「感情シート」

カ まとめ

授業の最後に振り返りと次回の授業の準備として、リフレクションカードの記入を行った。リフレクションカードの内容と集計結果は、次の図 5、図 6 のとおりである。

[本日の自己評価] 2017. . 3年 組 番 氏名 _____ • 思考のアクティブ度を振り返ろう。（○をつけよう） 5. 完璧！ 4. ほぼOK 3. できたかな 2. まだまだ 1. 少しね 0. 思考停止(zzz) • 本日の授業内のグループ活動で、自分ができたことに✓を入れよう。 ☐ 会話する ☐ 質問する ☐ 教える ☐ じっくり聞く ☐ 仲間の意見への賞賛 ☐ リーダーシップを発揮する • サライェヴォ事件に対して、自分が〇〇（塙、露、独）の皇帝だとしたら、どのように国としての対応をとるだろうか。（次回のシート作成の準備として） _____ _____

図5 リフレクションカード

• 思考のアクティブ度 5. 完璧！ (33.3%) 4. ほぼOK (40.0%) 3. できたかな (20.0%) 2. まだまだ (6.7%) 1. 少しね (0.0%)	• 本日の授業内のグループ活動で、自分ができたこと (複数回答) 会話する (86.0%) 教える (33.3%) じっくり聞く (80.0%) 質問する (33.3%) 仲間への賞賛 (73.3%) リーダーシップの発揮 (26.7%)
--	---

図6 リフレクションカードの集計（一部省略）

(2) 第2次（第2時、第3時）

第2時では、導入において「世界大戦に向かってしまった各国の動きをどの時点で止められたか」について、第1時の内容を踏まえて短時間で考えた。

第3時では、第一次世界大戦の結果を大きく左右した出来事について考察させ、理由と「もしその出来事が起こらなかったらどのようになったか」についてシートを作成した後、発表を行った。

(3) 第3次（第4時、第5時）

第4時、第5時では、社会主義国家の登場によって、主な国々がどのように対応したかなど、当時の国際関係を多面的・多角的に考察した。

5 更なる改善に向けて

(1) 成果

ア 生徒の主体的な活動が行われるようになった。

講義形式の授業では、なかなか発言しなかった生徒も、積極的に授業に参加するようになった。教師のなぜ、という問いに何とかして答えようとする生徒が増え、クラス全体の学びに向かう雰囲気も良くなった。生徒は、単に知識をノートにまとめるだけではなく、これまでよりも深く、様々な視点から考えるようになっていたとの実感を得た。

イ 生徒のプレゼンテーションスキルが向上した。

「A4判シート」の記入のルール(本時では「感情シート」)を徹底した。分かりやすく伝えることの大切さを折に触れ生徒に話し、教師も一目で要点が伝わる「A4判シート」の効果的な見せ方に心掛けた。このことで、生徒はどう効果的に「伝えるか」の視点をもつようになり、見せ方についても深く考えながら「感情シート」の作成を行うようになった。

ウ 視覚的な効果が高まり、学習内容を捉えやすくなった。

一画面単位でしか示せないプレゼンテーションソフトに比べ、複数のシートを一度に示せる上、授業の流れが黒板に残るので、授業の全体像が把握しやすくなった。

また、「A4判シート」を比較することで多くの視点が明確になった。例えば、第一次世界大戦後の内容について、ドイツの「感情シート」とそれ以外の国の「感情シート」を国ごとに比較できたので、国際関係の図を掲示するよりも、具体的に関係性や転換点を「見える化」することができた。

エ 生徒が間違えた箇所から、生徒にとって「難しい」内容を教師が把握できるようになった。

生徒の作業の時間や、生徒とのやり取りの時間が増えることで、今まで教師が気付いていなかったり、説明を簡単に済ませていたりしていた箇所が、生徒にとって十分に理解することが難しい内容であったことなどが見えてきた。逆に、今まで教師が時間をかけて説明をしていた箇所が、生徒は十分に理解していた内容であったことも見えてきて、授業における説明の重点ポイントを洗い出すことができた。

(2) 課題

ア 評価をどうするか。

「A4判シート」を作成する活動により、どの程度学びが深まったかという評価をどうするかが検討事項である。従来型の試験問題では、本時のようなスタイルの授業を通して学力が身に付いたかどうかを見極めることが難しい。

イ 効率的なノート作成を行えないか。

本時のようなスタイルの授業は、生徒は黒板の内容をノートにまとめにくい。そのため、ノートをとる生徒が少なく、後日見返した時に、どのようなことを学習したのかが分からなくなる。現在、リフレクションカードでは、活動自体の振り返りを中心に行っている。今後は、活動よりも、一時間で学んだ内容を整理する時間に移行し、見返した時に学んだ内容が分かるノートづくりを目指し工夫したい。

ウ 他教科との効果的な連携を強められないか。

発表スキルの向上や、文章でまとめる能力、教科書や資料を正確に読み取る能力を向上させる指導法の改善は、地理歴史科、公民科だけに限らず、多くの教科で取り組んでいる。今後は、教科の枠を越えて成果を共有し、学び合う取組を校内で更に促進すれば、新学習指導要領が目指す生徒の姿に近づくことができるだろう。

事例 2 生徒間の学びを重視した授業の実践 ～ フォトランゲージで育む課題解決能力 ～	
単元名	<地理A> 世界の気候と生活 世界の民族・宗教と生活・文化
これまでの課題	多くの地理歴史科の授業で、教師が生徒に正しい答えを求める発問が中心になっていることが課題であると捉えていた。教師が発問しても、生徒は間違えたくないから答えない。そうすると、教師はヒントを出して答えを考えさせる。しかし、生徒はそれでも間違えたくないから答えない。更に、教師はほぼ正答のようなヒントを出す。そこまでヒントが出ると生徒はようやく答える。このような流れが繰り返されている。指名された生徒もそうであるが、指名されず先生と生徒とのやり取りを聞いている生徒も、主体的な学びがないから、深い学びにつながらない。
授業改善のポイント	この流れに変化をもたらすためには、生徒が主体的に学ぶ授業展開が必要である。そのために問い（課題）を改善し、全ての生徒が達成感を得られ、意欲を持って主体的に考えられる授業を目指した。生徒が授業で学んだ知識をもとに、課題に対して粘り強く考え、答えや結論を導き出すことができ、更に「なぜその答えになったのか」という判断の根拠を具体的に示すことができるようにしたいと考えた。そのために、まずは生徒の実態に合わせた考察しやすい題材や教材を意識し、苦手なことでもスモールステップを設定して取り組むことができるようにした。具体的には、写真などの視覚教材を通して、必要な情報を読み解き、課題の解決に向け挑戦できるように授業を改善した。生徒間での対話的な学習を通して、多面的で多角的な捉え方を学び、必要な情報を関連付けて考えをまとめ、それらを発表・表現する過程を通して、深い学びにつなげていくことを目指した。

1 指導観

(1) 本単元について

「世界の気候と生活」、「世界の民族・宗教と生活・文化」の両単元は密接な関わりをもつ。このため、両単元を貫く学習の総まとめの時間を設定し、授業で学んだ知識を用いて、地域の気候やそこに住む民族・宗教、生活・文化を総合的に類推し、考えて判断した理由や根拠をまとめて発表するという課題を解決していくことを通して、深い学びにつなげることを目指した。

そのために、生徒自身が主体的に取り組みやすい写真等の視覚教材やワークシートを活用し、多くの情報や視点を主体的に引き出すために、生徒間での対話的な学習を通じた気づきや学びを重視した授業を展開した。また、その成果を発表したり、表現したりする活動を通して、深い学びにつなげたいと考えた。

(2) 生徒の実態

本校生徒の卒業後の進路は、4年制大学への進学希望から就職希望まで多岐にわたる。このため、学習内容の精選や個に応じた支援が重要であると感じている。生徒は授業において、感想を積極的に発言するなど、授業への参加意欲は高いが、瞬間的に発言する傾向があり、じっくりと考察するに至っていない。地理に対する興味・関心や知識の程度に差が大きく、地理そのものに苦手意識をもつ生徒もおり、自分の言葉で表現することが苦手な生徒も少なくない。成功体験を積み重ねにより、生徒が自信を付けることのできる授業をつくる必要性がある。

(3) 生徒に身に付けさせる力

生徒間の対話的な活動を通して、多様な考えを柔軟に受け止めながら、課題に対して「なぜその答えになったのか」の根拠を具体的に示すことができるようにしたい。高校卒業後、社会人として働く生徒も多いことを意識し、問題や課題について粘り強く自ら考えられるようにしたい。また、そのように考察・判断した理由や根拠を示したり、説明したりする経験を通して、課題を解決していく能力を伸ばしてほしいと考えている。

2 単元の指導計画及び評価規準

(1) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
ケッペンの気候区分が違ふと、人々の生活も大きく違ってくることに興味・関心を持ち、それぞれの地域における生活や文化などに関する課題などについて意欲的に取り組もうとしている。	気候の特徴を踏まえ、それぞれの地域における生活、文化などに、気候がどのような影響を及ぼしているかについて類推し、多面的・多角的に考察し、適切に表現している。	気候区分や雨温図、人々の生活や文化、建築物や風景等に関わる写真等の視覚的な資料から、それぞれの地域の特徴を読み取っている。	ケッペンの気候区分についての基礎的な知識を身に付け、気候の地域性・共通性や、気候と植生、栽培作物、家畜、建築物等の関係性を理解している。

(2) 単元の評価計画

次	時	学 習 内 容	評 価 規 準
1	1	気候についてのオリエンテーション	【関心・意欲・態度】 ・気候の違いが、それぞれの地域における人々の生活に大きな影響を及ぼしていることへの興味・関心をもち、意欲的に学習活動に取り組もうとしている。 【知識・理解】 ・植生をもとにして考え出されたケッペンの気候区分について、基礎的・基本的な知識を身に付けている。
2	2	熱帯地域の自然と生活	【資料活用の技能】 ・地図や雨温図、写真等の資料から、熱帯地域が赤道付近に分布することや高温で雨量が多いことなど、熱帯地域の気候の特徴に必要な情報を読み取っている。 【知識・理解】 ・熱帯地域に暮らす人々の生活や文化についての基礎的・基本的な知識を身に付けている。
	3	乾燥帯地域の自然と生活	【思考・判断・表現】 ・乾燥帯地域と熱帯地域の人々の生活や文化の違いを比較して、気候の影響に気付くとともに、違いを生んだ要因や理由を表現している。 【関心・意欲・態度】 ・気候の違いが、それぞれの地域に住む人々の生活に大きな影響を及ぼしていることに対して興味・関心をもち、意欲的に学習活動に取り組もうとしている。

3	4	温帯地域の自然と生活	【関心・意欲・態度】 ・日本も含まれている温帯地域の気候の特徴についての興味・関心をもち、自分たちの日頃の生活と関連付けて考察するなど、意欲的に学習活動に取り組もうとしている。 【思考・判断・表現】 ・温帯地域の気候区に着目し、それぞれの気候区に見られる人々の生活や文化の特徴について、多面的・多角的に比較し、判断した根拠や理由を表現している。
	5	冷帯（亜寒帯）地域の自然と生活 寒帯地域の自然と生活	【資料活用の技能】 ・地図や雨温図、写真等の資料から、冷帯（亜寒帯）や寒帯地域の気候の特徴に必要な情報を読み取っている。 【知識・理解】 ・冷帯（亜寒帯）や寒帯地域に住む人々の生活や文化についての基礎的・基本的な知識を身に付けている。
	6	世界の民族・宗教と生活と文化	【関心・意欲・態度】 ・世界の民族の言語、宗教の多様性に興味・関心をもち、国際社会における民族問題の本質を探究するため、意欲的に取り組もうとしている。 【知識・理解】 ・言語や宗教、食事等が民族性を反映していることなど、世界の民族や宗教についての基礎的・基本的な知識を身に付けている。
	7	気候についてのまとめ	【思考・判断・表現】 ・気候の特徴を踏まえ、気候が生活、文化などに与える影響について、必要な情報を関連付け、多面的・多角的に考察し、適切に表現している。 【関心・意欲・態度】 ・各気候区分の特徴や、気候の違いが人々の生活に及ぼす影響に対する関心を高め、意欲的に課題に取り組もうとしている。
		本時	

3 本時の展開（7時間のうちの7時間目）

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準[評価方法]
導入 5分	- 気候区分の復習 - 本時の把握	- 気候区分の基本的な知識の復習をする。 - 本時の学習の目標と流れを理解する。	- 発問を通してポイントを確認させる。 - 自分だけで考えさせる。	
展開 35分	- 班での話し合い - 班ごとの発表 - まとめのクイズ	15枚の写真を、気候区ごとに分類するとともに、判断した理由や根拠をワークシートに記入する。 - 発表を聞き、見方を広げる。 - スライドで提示される数枚の写真から、どこの国を示しているのかを考え、根拠とともに発表する。	4つの班をつくる。 - 作業が進まない班には、写真の見方のポイントに関する助言を行う。 - 発表しやすい雰囲気をつくる。 - 自分の班とは違う意見などを書き取らせる。 - 写真の難易度を工夫し、徐々に答えを導き出せるようにする。 - 生徒の反応を見て、適宜、ヒントを出す。 - 正當に至らなくても、根拠とともに答えることを理解させる。	【思考・判断・表現】 - 気候の特徴を踏まえ、気候が生活、文化などに与える影響について、必要な情報を関連付け、多面的・多角的に考察し、適切に表現している。 [発表、ワークシート] 【関心・意欲・態度】 - 各気候区分の特徴や、気候の違いが人々の生活に及ぼす影響に対する関心を高め、意欲的に課題に取り組もうとしている。 [観察、ワークシート]
まとめ 5分	本時のまとめと振り返り		次回の学習内容を提示する。	

4 実践の様子

(1) 第1次（第1時）

第1時では、これから各地域の気候を学習する基礎となるケッペンの気候区分について確認し、基礎的・基本的な知識の定着を図ることを目指した。中学校における既習事項を確認するため、授業のはじめにワークシート（図1）を用いて学習に取り組んだ。ワークシートの作業などを通じて、気温や降水量の違いによって植生が変化することに、大きな捉え方でもよいので生徒が気付くことができるよう支援した。

次に雨温図の情報から、ケッペンの五つの気候帯（熱帯(A)・乾燥帯(B)・温帯(C)・冷帯(D)・寒帯(E)）に分類する学習を行った。中学校で学習して以来、久しぶりに雨温図について扱ったため、一人では考察することができない生徒も多く見られたが、友人と話し合うことで、少し時間はかかったが答えを導き出すことができた。

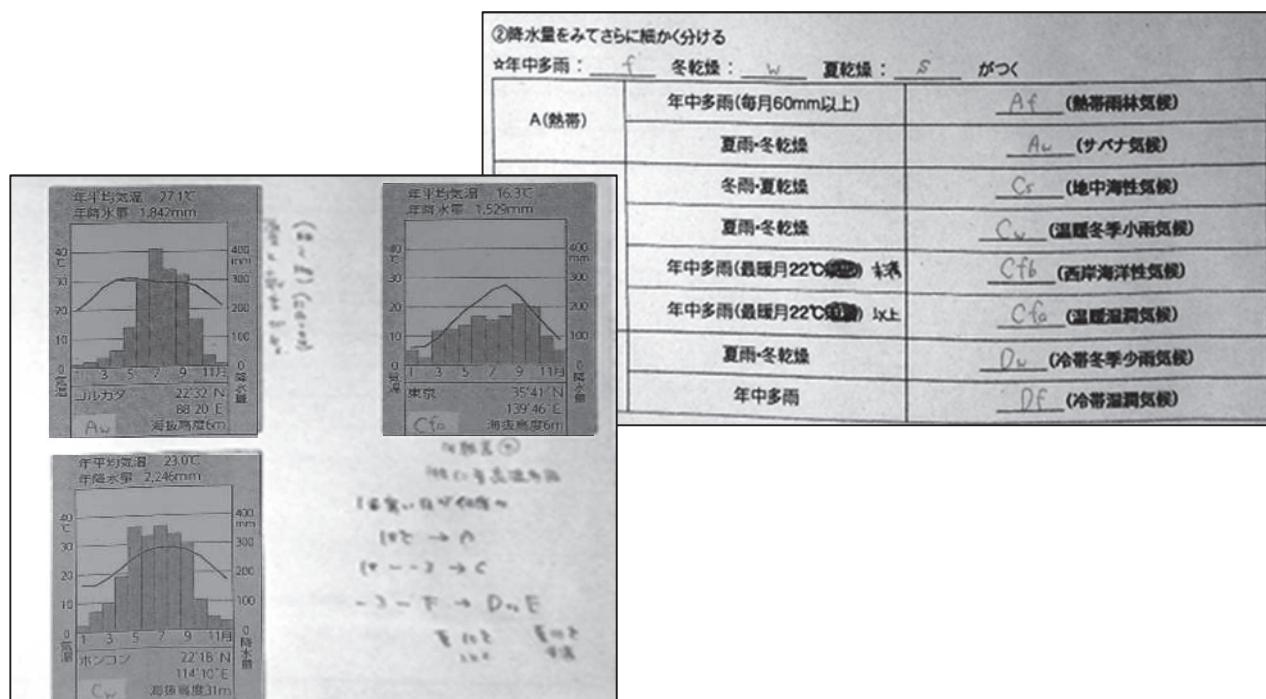


図1 既習事項確認のためのワークシート(一部)

(2) 第2次(第2時～第6時)

五つの気候帯それぞれの気候の特徴や、宗教(キリスト教・仏教・イスラーム)などの特徴について、教科書の写真を用いて必要な情報を収集する方法が身に付くよう授業を進めた。

まず、教科書に掲載されている問題を行った。結果は、8問のうち2問ほどしか正答につなげられず、事前の丁寧な指導が必要なことが分かった。そこで写真の中から、気候の特徴等を判断できると思ったポイントを生徒に挙げさせた。そして、それら全てのポイントに意味があることを伝え、特徴を見つけたことに自信が持てるような生徒への言葉かけに気を配った。

年度当初より、授業において、教師の発問に対して積極的に発言することの大切さを伝えてきた。また、生徒同士の対話も積極的になるよう、生徒が発言する機会を増やして、発言しやすい雰囲気づくりに取り組んできた。生徒の気付きや発言、生徒間の対話などを、教師が肯定することを心掛けたことで、意見が活発に出し合えるようになっていった。

(3) 第3次(第7時)(本時)

ア 本時の目標

本時の目標は、次の二点を設定した。一点目は、各気候区分の特徴や気候の違いが、人々の生活に影響を及ぼしていることについて関心を高め、意欲的に課題を追究することである。

二点目は気候の特徴を踏まえて、気候がそれぞれの地域の人々の生活、文化にどのような影響を及ぼしているかについて、多面的・多角的に考察するとともに、その考察した理由や根拠について、適切に表現することである。

イ フォトランゲージ

本時の目標を達成するための核として、第1次、第2次における生徒の授業中の様子を踏まえて、フォトランゲージの手法を用いた発問が適切であると考えた。そこで、クイズ形式の課題に挑戦させることとした。

フォトランゲージとは、写真を使って行う学習法である。写真を見て、「どこの国だろう」、

「ここに写っている人はどんな思いをしているのだろうか」ということについて考えたり、その土地の文化的な特徴が表われているものを探したり、写真を解説する簡単なタイトルなどを考えてみたりすることを通して、主体的に取り組む学習である。個人で考えても、グループで話し合ってもよい。写真を深く考えて、「読み解く」ことにより、様々な気づきや発見が生まれ、新たな思考につなげる学習である。

フォトランゲージの目的は、正答を知ることだけではない。正答とは違った考えを持ったときに、その原因となった自分の思考に気付くことである。教師は、間違った答えの背景をよく聞き、なぜそう思ったのか、丁寧に確認することが必要である。導き出した答えが誤りでも、思考の過程で評価すべき点はたくさんあると考える。生徒全員が想像力を十分に働かせ、のびのびと自由に思考し、それが全否定されない授業が、「主体的・対話的で深い学び」の実現に必要であると考えたのである。

ウ 本時の工夫した点 1…15 枚の写真を分類し、それぞれ理由をまとめる（個人の活動）

班活動を前提とした個人活動では、自由な発想を促しても、班の誰かの意見を当てにせず、深く考えないことが考えられる。そこで多くの写真を分類し、その結果をもとに班で話し合うこととした。写真は 15 枚用意した。作業量が多いことのデメリットもあるが、今回は、「自分も班活動に貢献しないと終わらないぞ」、「誰かに全部任せるわけにはいかない」などの動機付けの効果を狙いとした。

	気候の特徴・選んだ理由	植生・選んだ理由	住居・選んだ理由
A			
B			
C			
D			

たわわに実ったミカン ①	砂漠とオアシス ②	アマゾン川の蛇行 ③	イグルー ④
天然冷凍庫の市場 ⑤	モミジの紅葉 ⑥	雪原を行く犬ぞり ⑦	パオ ⑧
シロクマの親子 ⑨	半乾燥の草原 ⑩	スコール ⑪	タイガを流れる大河 ⑫
白壁の家々 ⑬	高床式の住居 ⑭	高床式の集合住宅 ⑮	

授業では、写真プリントとそれらを分類するワークシート（図 2）を配布した。写真は、著作権法第三十五条に基づき授業において無償で利用できる素材をまとめたウェブサイトなどから集めた。

15 枚の写真には、五つの気候区分（A～E）それぞれに対応した三つの観点（気候の特徴、植生、住居）に関する風景等が写っている。生徒は、写真から情報を読み取り、これまでの学習で得た知識等を活用して、15 枚の写真を分類し、ワークシートを作成した。

図 2 15 枚の写真（実際は写真を使用）とワークシート

生徒は活動を始めると、すぐに机間指導をする教師や友人に「答え」を聞く様子が見られた。そこで、この活動の目的は、写真を間違えないように分類するのではなく、写真の情報を読み取って「どの気候帯か自分で思考し判断する」ことであり、「自分の力でじっくり考え、自分の答えを記入する」過程が大切であることを伝えた。

その後も、つまづいている点について助言などをしながら、机間指導を続けた。これにより、一人で考える生徒が次第に増えてきた。しかし、写真を分類することで設定時間に達してしまい、分類した理由を全て記入できた生徒は少なかった。活動の目的をはっきりさせるまでに時間がかかり、時間が不足してしまった。

エ 本時の工夫した点 2…班での話し合いに、写真カードを用いる

個人の分類結果を持ち寄り、拡大したワークシートを使って、班の意見を一つにまとめた（図3・図4）。班員で協力して分類作業を行いやすくするため教師があらかじめ付箋に貼って作成しておいた写真カードを各班に配付した。写真カードを貼ったり、はがしたりしながら話合うことができるので、言葉だけの話し合いよりも、じっくり考えて課題に取り組むことができた。また、分類した理由も併せて記入したことで、班の思考の根拠が見えるようになった。



図3 班で意見をまとめている様子

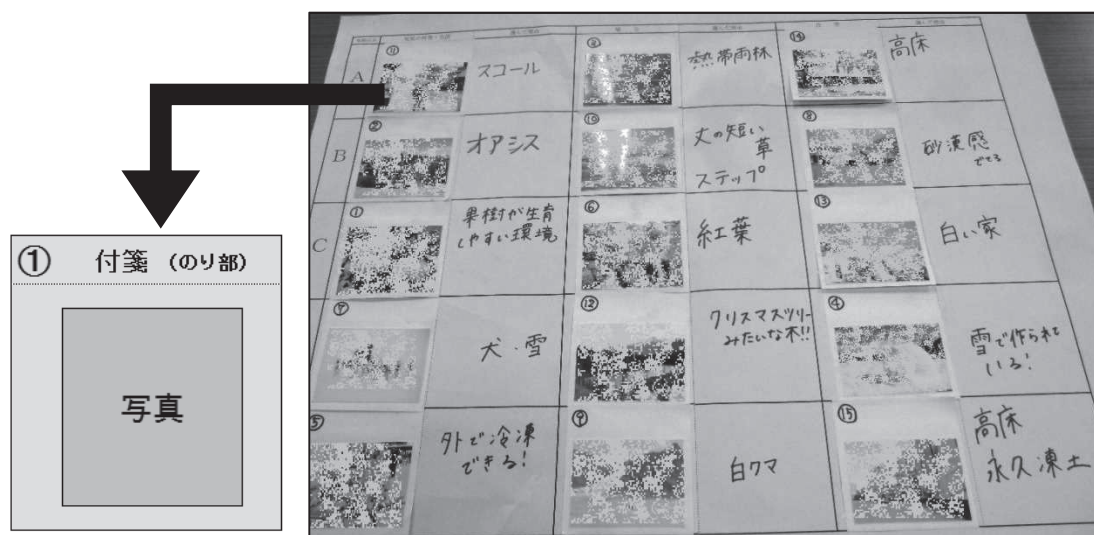


図4 写真カードの模式図とワークシート

1班を3～4名の少人数で編成したことと、ワークシートに写真を貼り判断した理由を記入するという、やるべきことを明確にした活動であったため、生徒は自分たちで役割分担がしやすく、班員全員が主体的に課題に取り組むことができた。普段はあまり積極的に発言していない生徒も、分類した理由を書いたり、周りの生徒と話し合ったりすることができた。活動時間を20分間と区切ったことも、見通しを持って活動することにつながった。

熱帯地域の高床式住居の写真を見て、その背景に写り込んだ植生に着目し「ハワイって感じ」と表現してみたり、かまくらに似た寒帯地域の住居であるイグルーの写真を見て、「雪だるまハウス」と名付けていたり、生徒同士が自由に意見交換のできる良い雰囲気であった。多くの生徒がこれまでの学習の成果を総動員して、積極的に写真の分類に励んでいた。

オ 班ごとの発表（クラス全体で意見を共有する活動）

各班の代表者が発表を行った。教師は、「なぜその写真を選んだのか」を判断した理由が曖昧な発表や、さらなる補足や説明を求めたい発表に関して補足の質問をし、班の発表のポイントを黒板にまとめていった。班によって分類が異なった箇所は、それぞれの班が判断した理由を聞き比べ、どれが正解であるかを全体で考察した。

注意したことは、どの班についても、みんなで意見をまとめた点と、それを発言した点について褒めたことである。正答を教師が一方的に教えるのではなく、生徒の発言を生かした形で答えを引き出したいと考えているからである。このようにして、各班の考えをクラス全体で共有し、思考を深めていった。

カ 本時の工夫した点3…国名当てクイズ（授業のまとめとして、再び個人で考える活動）

発展的な学習として、本時で学んだ手法をクイズ形式にし、ある国の気候や植生、有名な建造物や、生活・文化等の写真のスライドから、国を類推する活動をした。写真から読み取る情報の難易度を考慮して写真のスライドの配列を考え、授業で学んだ視点をもとに、次第に国を絞り込めるように工夫した。また、スライドを見せる時間を1枚目から6枚目にかけてどんどん短くし、最後のスライドは一瞬だけ見せるなどの工夫もした。

オーストラリアが解答となる例題に使用したスライドは、次の8枚である。

（1枚目）シドニーとパースの都市の景観

↓

（2枚目）魚や果物、野菜等を販売している市場（マーケット）

↓

（3枚目）アボリジニをはじめとする様々な人々（人種）が生活する様子

↓

（4枚目）グレートバリアリーフの海を泳ぐウミガメ

↓

（5枚目）シドニーのオペラハウスと水上タクシー

↓

（6枚目）エアーズロックと涸れ川（ワジ）

↓

（7枚目）サーフィンをするサンタクロース

↓

（8枚目）カンガルーの標識とコアラ

まとめのクイズを全6問行い、写真から有用な情報を読み取り、既習事項と関連付けて考えることの大切さについて、生徒は復習することができた。教師も、生徒の理解がどれだけ深まったのかを確認することができた。

5 更なる改善に向けて

(1) 成果

生徒の実態に合った取り組みやすい課題を設定し、学びに向かう意欲を引き出し、班の活動による生徒間の主体的なやり取りを通して、多面的・多角的に考察させ、深い学びにつなげる取組を行った。本時の実践後のアンケートでは、次のように、生徒から好意的な意見が挙げられた。

- ・一人では分からなかったところを、みんなの意見を聞いてまとめることができた。
- ・意見を出し合えるので、考えが深まって授業が楽しい。
- ・普段話をしない子も含め、みんなと話し合って、いろんな答えの中から選ぶのが楽しかった。
- ・間違えて覚えてしまっていた知識について、見直すことができたことが良かった。
- ・グループで話し合うことが楽しくて、自分以外の人の意見を聞けて良かった。
- ・文字だけでなく写真があったことで分かりやすかった。
- ・写真を見ながらその特徴を表にまとめることで分かりやすいと思った。
- ・最後のクイズを考えるのが楽しかった。またやってほしい。

生徒のアンケートには、「じっくり考えることが楽しかった」、「自分たちで考えたことが楽しかった」、「分類した理由を聞きながら説明されると分かりやすい」、「ほかの班の意見を聞いて、考えが深まった」という記述が見られた。単元のまとめの学習課題を、生徒は意欲的、主体的に探究できたものと考えられる。今回の実践では、生徒が諦めないで課題に取り組めるように、生徒自身が導き出した答えを否定せずに、課題に前向きに取り組めるような声かけを意識した。その際、「なぜ」と生徒に問いかけることを意識しつつ、写真で注目する視点やポイントを机間指導しながら繰り返し声かけをした。明らかなヒントにならないように気を付けることで、生徒自身が深く考察できるよう配慮した。

今回、「主体的・対話的で深い学び」を目標とした授業実践をしてきたが、そのための前提には生徒の意欲を引き出すことが非常に重要であることを再認識した。主体的な学びに向かう姿勢や態度を育む土台として、生徒の実態に応じた課題を整えていくことが不可欠であることを感じた。これまでの生徒の学習活動をよく分析して設定した授業だったからこそ、一問一答ではない深く考える「なぜ」という問いに対しても、粘り強く挑戦することができていたと考える。深い学びへと向かうためには、教師も教材研究をしっかりと行うことが必要条件である。

(2) 課題

「唯一の正答を求めることだけが学ぶことである。」このように生徒は考えがちである。授業においても、定期テストで高得点をとる生徒の答えが正解だと思ってしまう傾向があり、自ら考えずに、すぐその生徒に「答え」を聞いてしまうことも見られる。このことから、正答に至ることの大切さに加えて、「思考する」ことの大切さも、様々な視点から生徒に伝えていかなければならないと強く考えていた。また、本実践で行った課題解決型の学習により身に付く力が、将来どのように役に立つのかということを示すことが必要なのだと思う。

課題解決型の学習の一つの手法として実践したフォトランゲージは、素材さえ見つけられれば、準備は簡単である。今回はいつも以上に、教材研究や授業準備に時間をかけ 15 枚の写真を準備し、更には6問のまとめのクイズを作ったが、フォトランゲージは1枚の写真からでもできる学習活動である。大がかりな準備は必要ないので、今後も日常的に工夫・改善を続けることで、より効率的に活用できる手法に育てることができる。

もちろん、手法の工夫・改善とともに必要なことは、発問の質の向上である。生徒を更に深い学びに導くため、考えることの大切さを生徒が感じられようにしていかなければならない。よく考えて課題を解決できたという成功体験が得られる授業を積み重ねていくことで、より深い学びへと向かう学習意欲が育っていくものと考えている。

〔参考文献等〕

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成 21 年）

事例3 対話を通して理解の深化を図る授業の実践 ～ 歴史への関心を高め、思考力の育成を目指す ～	
単元名	<日本史B> 軍部の台頭
これまでの課題	- 生徒の多くが、「日本史は覚えてしまえばいい」と思っており、日本史を学ぶ意義を理解せず授業に望んでいる現状が見受けられた。 - 生徒への問いかけが、「この人物は誰か」、「この事件は何か」というような、短時間で知識の定着を確認できるものに偏りがちであった。授業の進度保証を優先した結果ではあるとはいえ、授業改善が必要であると感じていた。
授業改善のポイント	- 生徒の歴史に対する関心を高め、意欲を喚起させるとともに、既習知識を生かして、生徒が主体的に考え、表現する活動を取り入れた。日本史を学ぶ意義を理解し、歴史的な見方・考え方が深まる授業実践を目指した。 - 単元計画を見直し、進度保証と新たな取組を両立させ、文章にまとめ記述することを意識した学習活動を設定した。卒業後の学びの支えとなるよう、生徒の思考力・判断力・表現力を更に伸ばしていくことを目指した。

1 指導観

(1) 本単元について

歴史的分野において重要なことは、「どれだけ多くの知識を覚えるか」ではなく、歴史的事象について多面的・多角的に考察し、「よりよい未来を創造しようとする意欲を高める」ことにあ
る。本単元に当てはめると、戦争の経過についてどれだけ事細かに覚えるかではなく、平和で民
主的な国家の形成に努めることの重要性を認識することが、本単元を学ぶ上で大切な要素である。

(2) 生徒の実態

日本史に対する興味・関心は個人差が大きく、基礎・基本の習得が不十分な生徒も見受けられ
る。一方で学習に対しては意欲的であり、授業にまじめに取り組んでいる。しかし発問をすると、
用語を答えるなどの一問一答の形式には答えられるが、史実の前後関係や事象の原因・影響など
については積極的に発言できない生徒が多い。生徒自身が考えたり、その考えを深めて発表したり
する機会が少なかったようであり、「日本史は用語を覚えればよい」と思っている生徒が多くい
る。

(3) 生徒に身に付けさせる力

欧米列強の動向を背景に、満州事変から近衛文麿内閣が発足するまでの日本の動向と軍部の台頭、
日本の対外政策の推移について関心を高め、これらについて意欲的に追究させるとともに、多面
的・多角的に考察する力を身に付けさせたい。

また、昭和恐慌から脱出し、国家主義が高揚する中で、軍部の影響力が増大したことを理解す
るとともに、様々な資料からその事実を読み取り、分かりやすくまとめ、適切に表現することが
できる力を身に付けさせたい。そして、平和で民主的な国家の形成のために、私たちは何ができ
るのか、何をすべきなのかを自覚させたい。

2 単元の指導計画及び評価計画

(1) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
日本の動向と軍部の台頭、日本の対外政策の推移について関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	日本の国内情勢、欧米やアジアの国々との関係などを多面的・多角的に考察し、それらの影響などについて、適切に表現している。	文献、絵画、グラフなどの諸資料から有用な情報を適切に読み取り、分かりやすくまとめている。	昭和恐慌から脱出し、国家主義が高揚する中で、軍部の影響力が増大したことを理解し、その知識を身に付けている。

(2) 単元の評価計画

次	時	学 習 内 容	評 価 計 画
1	1 本時	満州事変	【資料活用の技能】 ・「なぜ満州は日本の生命線なのか」について資料から読み取り、その理由を分かりやすくまとめている。 【思考・判断・表現】 ・個人の考えを持ち寄り、様々な事項を考慮して話し合いながら、班としての考えを適切に表現している。
2	2	政党内閣の崩壊と国際連盟からの脱退	【関心・意欲・態度】 ・満州事変から国際連盟脱退に至る経緯について、世界の動きと関連付けて意欲的に追究しようとしている。 【思考・判断・表現】 ・政党内閣制の終焉がもたらした影響について考察している。
3	3	恐慌からの脱出	【知識・理解】 ・金輸出再禁止が日本経済に与えた影響、欧米諸国の世界恐慌への対応、世界恐慌後の国際情勢について理解している。 【関心・意欲・態度】 ・日本の重化学工業化と農村の復興を、具体的な事例を通して意欲的に追究しようとしている。
4	4	転向の時代 軍部の動向	【資料活用の技能】 ・国家主義の伸長による様々な事件等について、資料から必要な情報を読み取り、分かりやすくまとめている。 【知識・理解】 ・軍部の圧力により、政党政治が否定された時代背景について理解している。
5	5	二・二六事件	【資料活用の技能】 ・二・二六事件に至る経緯とその背景について、資料から有用な情報を適切に選択し、読み取ったり、まとめたりしている。 【思考・判断・表現】 ・二・二六事件後の影響について、多面的・多角的に考察し、適切に表現している。

3 本時の展開（5時間のうちの1時間）

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準 [評価方法]
導入 5分	本時の課題の把握	・「なぜ満州は日本の生命線なのか」を予想する。 ・授業の最初の時点での自分の考えをワークシート①に記入する。	・相談させず、それぞれ個人で考えさせる。	
展開 40分	課題の手掛かりとなる資料の読解 情報の交換と話し合い 各班の発表	・「なぜ満州は日本の生命線なのか」という「メインの問い」の答えを導く上で助けとなるワークシート②の小問を解く。 ・資料にある小問を手掛かりにして、「メインの問い」についての自分の考えを100字程度でまとめる。 ・各ブロックから1人ずつ集まり3人の班をつくる。それぞれの考えを持ち寄り、「メインの問い」に対する考えをホワイトボードにまとめる。 ・班の考えを代表者が発表するとともに、他班の発表を聞き、考えの相違に気付くとともに、疑問点を質問する。	・ワークシート②は3種類(資料A・B・C)用意する。 ・3ブロックに分け、ブロックごとに違う種類のワークシート②を配付する。 ・自分の考えを次の活動で他者に伝えることについて意識させる。 ・絵や図を使うなど、ホワイトボードのまとめ方を助言する。 ・班のメンバー全員が話し合って考えをまとめるよう声をかける。 ・各班の考えの特徴を明確にする解説を適宜加え、生徒が思考を深められるよう支援する。	【資料活用の技能】 ・「なぜ満州は日本の生命線なのか」について資料から読み取り、その理由を分かりやすくまとめている。 [ワークシート②] 【思考・判断・表現】 ・個人の考えを持ち寄り、様々な事項を考慮して話し合いながら、班としての考えを適切に表現している。 [ホワイトボード、発表]
まとめ 5分	本時の学習のまとめ	・導入で記入した内容と比較しながら、学習後の自分の考えの変容をワークシートに記入する。	・個人でまとめさせる。 ・優れたものは次時に発表してもらうことを伝える。 ・全種類のワークシート②を配布し、参考にさせる。	

4 実践の様子

(1) 知識構成型ジグソー法を参考にした授業展開

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うために、東京大学 CoREF が独自に開発した学習法である知識構成型ジグソー法を参考にして、次に示したように授業を展開した。

ア STEP.0 問いを設定する

CoREF は、既知っていることや、三つか四つの知識を部品として組み合わせることで解けるものになるように設定し、その問いを解くのに必要な資料を、知識のパートごとに準備している。

そこで本事例では、まず、「なぜ満州は日本の生命線なのか」という「メインの問い」を設定し、「メインの問い」の答えを導く上で助けとなるワークシート(資料A・B・C)を準備した。

イ STEP.1 自分のわかっていることを意識化する

CoREF は、「問い」に対して、はじめに一人で今思いつく答えを書いておくとしている。

そこで本事例では、教師は「メインの問い」を設定し、生徒はまず個人で5分間、「メインの問い」に取り組んだ。

ウ STEP.2 エキスパート活動で専門家になる

CoREF は、同じ資料を読み合うグループを作り、その資料に書かれた内容や意味を話し合い、グループで理解を深めるエキスパート活動をするとしている。

しかし、本事例では個人活動によって理解を深めることとした。「メインの問い」の答えを導く上で助けとなる三種類のワークシート(資料+資料に関連した小問)を配付した。ワークシートは、三種類全てを生徒に配布せず、クラスを3ブロックに分け、それぞれのブロックごとに違う種類のワークシートを配布した。個人で取り組ませたねらいは、資料から情報を読み取り、自分の考えを広げたり深めたりして、その結果を100字程度にまとめる作業を通し、「メインの問い」への見通しを持たせることにある。じっくりとまとめたものを持ち寄り、班別活動につなげたいと考えた。

エ STEP.3 ジグソー活動で交換・統合する

CoREF は、エキスパート活動で分かってきた内容を説明し合い、理解を深め、理解が深まったところで、それぞれのパートの知識を組み合わせ、問いへの答えを作るとしている。

そこで、本事例でも3ブロックそれぞれ1人ずつからなる班を形成し(図1)、それぞれが考えた意見をもとにして、「メインの問い」に関して話し合いながら、ホワイトボードにまとめていった。班の構成は3人とし、全ての生徒が議論に参加できるように工夫した。

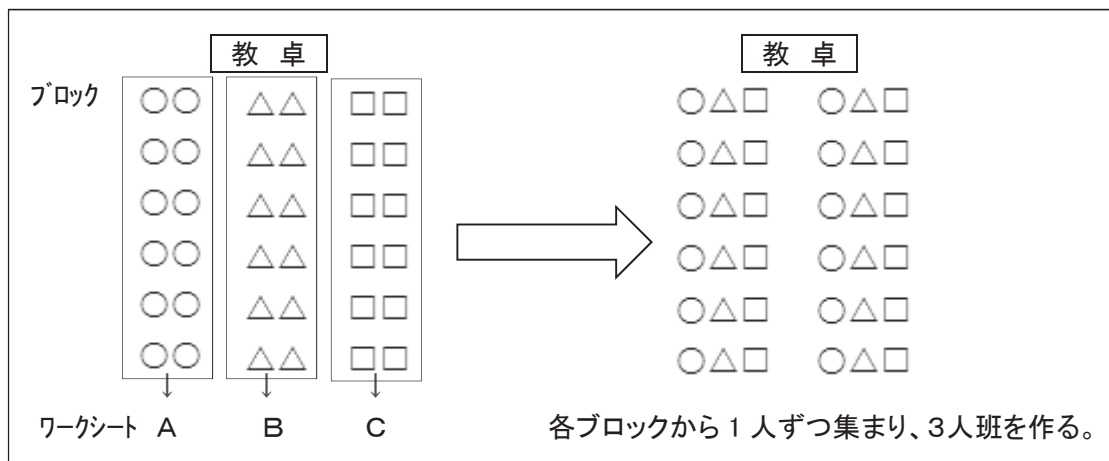


図1 班の構成

CoREF は、答えが出たら、その根拠も合わせてクラスで発表するとしている。

力 STEP.5 一人に戻る

そこで、本事例でも、再び個人で、改めて「メインの問い」に取り組んだ

(1)に示した知識構成型ジグソー法を参考にした授業を、繰り返し実践した。生徒がこの学習法に慣れていくに従い、効率的な授業展開につながるようになり、生徒が見通しを持って考えられるかどうかについてより強く意識しながら、「メインの問い」や小問の設定を行うようになった。

班の話合いについても、事前にルールを共有する必要性が分かってきた。机の周りに私物を置かない。三つの机をきちんと隣り合わせて班をつくる。誰が司会を務めるか、誰が記録するのか、誰が発表するのかなどの役割を事前に割り振る、などである。

新たな取組の継続は、少しずつでも成果を上げていくことである。そのために、授業実践と改善を繰り返してきた。以下の授業実践は、半年間続けてきた成果である。

ア 導入

「なぜ満州は日本の生命線なのだろうか」という「問い」を設定し、「メインの問い」とした。配付したワークシート①（図2）では、生徒が自分と結びつけて主体的に考えることができるように、問いかけ方を更に工夫し、「もし、あなたが当時の陸軍幹部であったなら……」という場面の設定を行った。生徒はまず個人で5分間、「メインの問い」に取り組んだ。

以下省略

66

イ 展開1…図表などをもとに小問に答える（図3）

「メインの問い」の答えを導く上で助けとなる小問を載せた3種類のワークシート②（図4-1、図4-2）を配布した。クラスの31名の生徒を3ブロックに分け、資料Aを10名に、資料Bを11名に、資料Cを10名に配布した。小問の答えが書きやすいように、図表などを精選したり、二つの答えを書くことができるようにしたりするなど工夫をした。

この活動で考えた内容を、次の班活動で他のメンバーに説明しなければならないので、小問に取り組ませる前に、活動の目的を明確に生徒に伝えた。

資料Bと資料Cを担当した生徒は比較的早く小問の答えを書くことができた。しかし、資料Aを担当した生徒は、どのように答えてよいのか分からず苦戦していた。図表の説明を加えるなどの支援をして考えを深めさせたが、生徒をよく理解して小問を設定する難しさを改めて感じた。



図3 資料の小問に取り組む様子

資料A

【1930 年頃の日本の経済状況と中国の状況】

■日本の経済状況

1929 年～1931 年頃の日本の貿易について、どのようなことが読み取れるでしょうか。またそのように変化した原因はなぜでしょうか。

■中華民国成立後の状況

中華民国成立後も中国は安定せず、統一を欠き、各地の軍閥が力を持ち、バラバラの状況でした。そのため、欧米列強や日本は中国に進出し、様々な利権を獲得していました。

蒋介石は中国統一のために北伐を開始し、1928 年に軍閥が中国国民政府に合流し、中国の統一が果たされました。そして、中国では不平等条約の撤廃、国権回収を要求する民族運動が高まっています。

問い

1930 年頃の日本の経済状況とその原因について説明しましょう。また、1928 年以降の中華民国の状況から、今後、中華民国は日本にどのようなことを要求してくると思われませんか。予想して 100 字でまとめましょう。

	20
	40
	60
	80
	100

日本の貿易

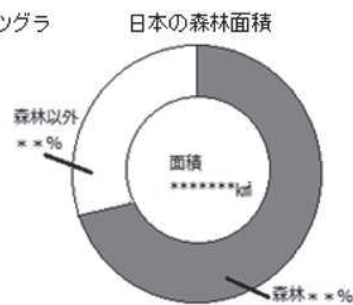
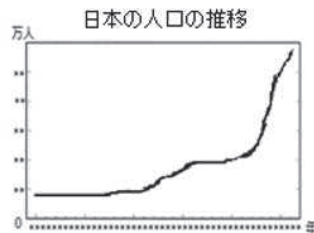
北伐と山東出兵

図4-1 ワークシート②（資料A）（ガラスや地図は実際のもののイメージ）

【日本の人口と満州】

■日本の人口

1930年頃の人口は、それまでと比べてどのように変化していますか？
この変化によって、どのような問題が生まれたのでしょうか。ドーナツグラ
フを見て、考えてみてください。



■満州の地政学

1930 年頃、社会主義国だったのがソビエト連邦やモンゴルです。当時、朝鮮半島を占領していた資本主義国である日本にとって、社会主義という思想は脅威でした。

日本の面積は 38 万 km²であるのに対して、満州の面積は約 130 万 km²です。

1930 年頃の東アジア



問い

日本にとって、満州はどのような場所であるといえるでしょう。日本の人口の推移や、満州の地政学的位置などを踏まえて、100字でまとめましょう。

[illegible]

資料 C

【日本と満州の資源】

■日本の資源

表を見て日本の資源の特徴について
どのようなことがいえるでしょうか？

日本の生産高を1としたときの、アメリカの生産高

物質名	1938年	1941	1944
石灰	***	***	***
石油	***	***	***
鉄鉱石	***	***	***
鉄鉄	***	***	***
銅塊	***	***	***
亜鉛	***	***	***
計	***	***	***

■満州の地下資源

満州ではどのような地下資源が産出されていたのでしょうか？

中国の石油・石炭・鉄鉱石の生産地



■ 石炭 ▲ 鉄鉱石 □ 石油

問い

日本の地下資源の特徴と満州の地下資源の特徴についてまとめましょう。その上で、日本における満州の役割について考察しましょう。

20

図 4-2 ワークシート②(資料 B・C)(グラフや地図などは実際のもののイメージ)

ウ 展開2…班ごとに「メインの問い」の答えをつくる

配布されたワークシート②の小問への取組が終わった後、教師が指示して、異なる資料を担当し生徒が1人ずつからなる3人班を作らせた。班ごとに、司会と記録と発表する生徒を指定し、記録の生徒が中央になるよう、3人分の机を横に接続させて班を作らせた。

班では、ワークシート②を通して考えた内容を持ち寄り、それぞれ説明を行った。自分が担当した資料から導いた考えと、他の班員の考えとを関連させながら理解を深めさせ、「メインの問い」への答えを、班で討議しながら練り上げていった(図5)。答えがまとまった班から、順次、ホワイトボードのまとめや、発表内容の確認などの発表準備を行った(図6)。準備時間は20分間とした。班での活動内容のおおまかな時間配分は全体に示し、班員の役割も活動開始時に決めておいたので、生徒たちは自分のなすべきことが分かり、活発に話し合いができた。



図5 班の取組の様子

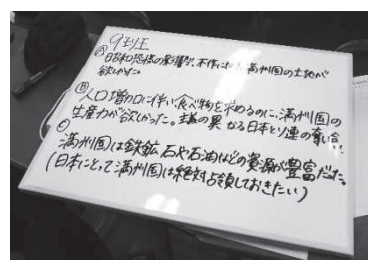
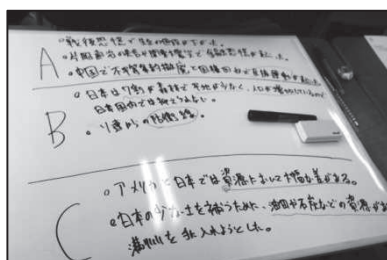


図6 班の考えをまとめたホワイトボード

エ 展開3…班の成果を発表する

班ごとにホワイトボードにまとめた考えを発表した。発表を聞く生徒たちも、それぞれの発表にしっかりと耳を傾けることができた。

一方で、発表方法の改善が今後の課題となった。表現を工夫するよう指示していたが、発表の場所、ホワイトボードの高さ、視覚に訴えるまとめ方、全員が分かりやすく聞きやすい話し方など、多様な説明の方法を生徒にもっと考えさせ、考えがもっと深まる発表にすべきであった。発表時間も延びてしまい、質疑の時間が確保できなくなってしまった。プレゼンテーション能力の大切さ、発表の目的、その後の質疑による学びの大切さなどを明確に生徒に示していなかったことが原因であり、今後の反省点となった。



図7 班の発表の様子

オ まとめ

自分の席に戻り、授業を振り返って、個人で「メインの問い」に改めて向き合った。生徒がまとめたワークシート①を見てみると、多くの生徒は授業の導入時よりも、授業のまとめの時点での記述の方が文章量も増えた。自分の言葉で表現してまとめられており、理解が深まっていることが見て取れる（図8）。思考をして問い続け、共に考えをつくりあげる過程を通して、多角的な視点が生まれた結果である。

《授業の最初の時点での自分の考え》 ・人口が増え、食料不足である日本は広大な土地で食料を生産できる満州は必要不可欠であるから。 ・併合している韓国、北支那の侵略を防ぐため。
《授業の最後の時点での自分の考え》 ・恐慌で経済状況が悪いのに加えて日本は人口増加に伴い広大な土地と食料を求めようになり近場でその要求を満たしている満州国はぜひ手に入れたいと欲していた。 ・また、社会主義国であるソビエト連邦との衝突を鑑みで防衛線として満州国は必要だったから。

《授業の最初の時点での自分の考え》 ・日本が広い ・近辺からの侵入を防ぐ
《授業の最後の時点での自分の考え》 ・日本の人口増加（食料不足） → 満州は広い ・近辺が狭い → 満州が1つの壁にはなる ・日本は資源が必要 → 満州には豊富 ↓ 今後のため（国内・列強との関係）の メリットが大きい

図8 ワークシート①（上段を導入で記入。下段をまとめで記入）

5 更なる改善に向けて

下に示したのは授業後のアンケート結果である。

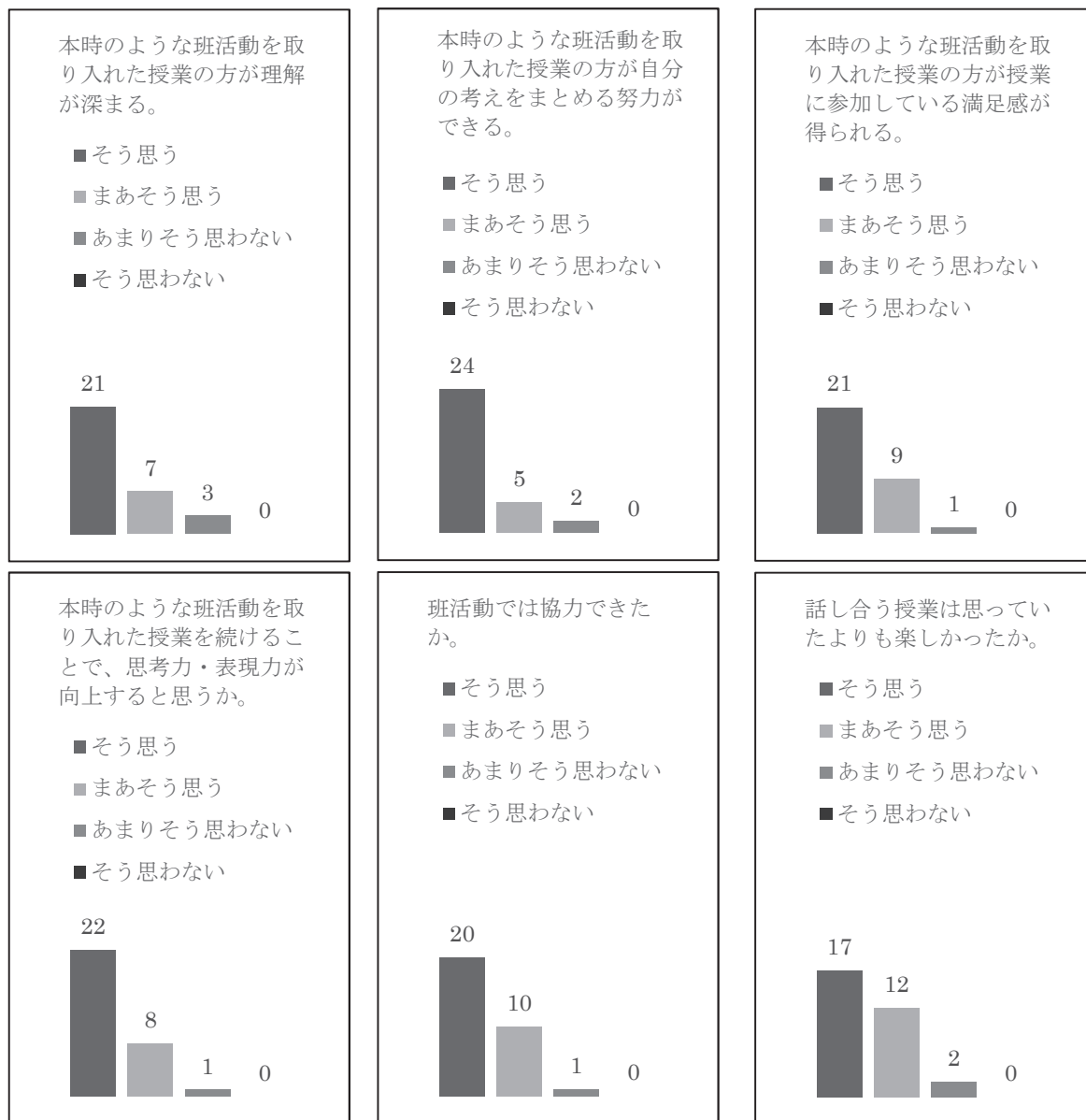


図9 生徒アンケートの結果（単位：人）

(1) 成果

知識構成型ジグソー法を参考にして班活動を取り入れた授業は、生徒からの良い評価につながった。次は生徒の記述の一部である。

- ・いつもより積極的にできた。
- ・積極的に意見を交換することで、理解が深められた。
- ・多角的な意見を聞くことができて、大変ためになるものであった。
- ・用語を覚えるだけでなく、つながりを考えて学習しようと考えたので、良い機会になった。
- ・入試の対策になるので、もっとやるべきだと思った。

多くの生徒が、授業に参加しているという満足感を得ていたことが分かり、大きな成果となった。班活動により、自分の考えと仲間の考えを結びつけたことで、理解も深まったと考えられる。

また、「発表の際に、自分で上手くまとめて話すことができず、プレゼンテーションをすることの難しさを感じた」という意見もあり、班でまとめた意見を他者に分かりやすく発表することの難しさを感じた生徒もいた。表現することの難しさや大切さについて、プレゼンテーションを通して認識した生徒がいたことも、成果の一つである。今後も、自分の知識と図表から分かったことを結びつけ、それらを持ち寄って班での対話により、新たな考えを生み出すような授業を展開し、生徒の深い学びを実現したい。

これからの生徒にとって必要な力とは、自分の力で考え、言葉にして表現する力、そして他者と話し合っ、自分たちの考えをより良いものに磨き上げ、それを適切に表現していく力である。今回の授業実践は、そのような力を育成する一助となったのではないかと考える。

(2) 課題

アンケート結果を見ると、「もう少し発表を聞いてみたい」、「発表をまとめる時間がもっとあると良い」、「まとめたことを発表できる機会がないとつまらない（時間の関係で、発表できなかった班があった）」といった意見があった。一班当たりの発表時間を決めておく良かった。他にも「資料A・B・Cの難易度に大きな差があった」という意見もあり、生徒の学習レベルに応じた適切な小問を準備することが大切であると感じた。

班活動を取り入れた授業は、講義形式の授業と比べ資料などの教材準備に時間がかかり、授業展開そのものにも時間がかかる。しかし、小問は宿題として家庭での学習を促したり、生徒が考えやすいような問いを準備したり、時間配分の仕方について工夫したりして、実施回数を重ねていくうちに、授業に必要な時間が確実に短縮されることが分かってきた。

ジグソー法の手法を取り入れた授業では、教師は学習環境の準備をし、授業では生徒の学習の案内役になることが大切だと感じた。生徒が活動をしている時は、教師は説明することを我慢し、指示も控えて、生徒がじっくり学べる環境を整えることに努めなければならない。どのような言葉をかけて話し合いを促進させるかについて、今後も授業実践を重ねていく必要があると感じた。

対話を通して理解の深化を図る授業の実践を重ねてきて、主体的・対話的に学ぶためには、日本史の基本的知識が必要であることを改めて実感した。知識の習得と活用の両輪を同時に回しながら学ぶことが大切である。授業では生徒にどのような力を付けさせたいのか、そしてそのためにはどんな学習方法が効果的かということを熟考して、授業づくりをしていきたい。今後も、講義形式の授業とともに、協働して課題解決を行う授業も充実させ、「考える」、「対話する」、「作り上げる」学習により、深い学びにつなげられる授業を展開していきたい。

〔参考文献等〕

- ・ 栃木県総合教育センター『これからの「思考力」の育成を目指して』（平成 28 年 3 月）
- ・ 東京大学「C o R E F 知識構成型ジグソー法」<http://www.coref.u-tokyo.ac.jp/>